

## 純粹直観について

——理性の自己認識としての超越論的感性論——

北 岡 崇

### 一 『純粹理性批判』の思索の方法

カントは、『プロレゴメナ』（一七八三年）第四節で、『純粹理性批判』第一版（一七八一年）の思索の歩みを規定する方法的手続きを次のように性格づけている。

『純粹理性批判』において、私は、この問題（「いったい形而上学は可能であるかという問題」）に総合的に取りかかった。すなわち、純粹理性そのものを探求し、この源泉そのものにおいて、理性の純粹な使用の諸エレメント並びに諸法則を、諸原理に従って規定 (Bestimmen) しようとした。この仕事は困難なものであって、体系のうちへと次第に立ち入って思索する決然たる読者が必要

とする。そしてその体系とは、理性そのもの以外には、まだ何ものをも所与 (Gegeben) として基礎におかず、従って、どのような事実 (Factum) にももとづかず、認識をその根源的な萌芽から展開しようとするものである<sup>(1)</sup>。

この記述によれば、『純粹理性批判』の思索は総合的方法に従う。すなわち、理性のみを前提し、この「基礎」に立ち、対象認識の「源泉」である純粹理性そのものを探求する。ところが、その当の思索も、理性による思索に他ならない。それ故、その思索は、『純粹理性批判』第一版では、理性の「自己認識」と呼ばれていた。そして、この理性の「自己認識」という思索は、次の状

況——すなわち、一方では、「自己認識」を遂行するのは理性であるが故に、理性はすでに「所与 (Gegeben)」であるとの認められねばならないが、他方では、理性の「自己認識」こそがまさしくめざされている認識であるが故に、理性ははまだそれ自身完全には解明されていない、むしろこの解明は課せられている (aufgegeben) という状況——の中で進展してゆく。換言すれば、さしあたり思索の働きそのものに即して自己措定しつつ (selbstsetzend) 自己自身に現前するにすぎない理性が、対象認識の「源泉」として働く「諸エレメント並びに諸法則」を規定する自己規定 (Selbstbestimmung) なごし「自己認識」の思索の中で、「感性」、「悟性」、等、対象認識の能力として解明されてゆくのである。

しかも、この思索は、先に引用した記述によれば、「どのような事実にももどつかない」思索である。とすれば、理性の「自己認識」は、理性の直接的な自己反省によって獲得されるのであろうか。確かに、『純粹理性批判』第一版の序文で、カントは、自分が問題にするのは「ただ理性そのものと理性の純粹思惟とだけ」であると述べ、更に、「それらのものの詳細な知識」は「自分

自身のうちに」見い出されるが故にそれを求めて「遠く自分の周囲に」出て行く必要はないと述べている。<sup>(3)</sup> 『純粹理性批判』の思索が理性という認識能力についての合理的心理学をめざしているかのような口振りである。<sup>(4)</sup>

他方カントは、『哲学において最近あらわれた尊大な語調』(一七九六年)の中で、「自己認識という巨大な労働によって下からさかのぼる」思索の歩みを拒否する「直観の哲学者」の振舞を、「尊大」と非難する。<sup>(5)</sup> 「下から」の思索の歩みということでカントの念頭にあるのは、『純粹理性批判』の思索の歩みである。そしてこの時、思索の出発点として語られる「下」とは、「経験の事実」の存する場所のことであろう。<sup>(6)</sup>

『純粹理性批判』の思索が、対象認識の「源泉」(純粹理性)を理性が解明・規定するという意味で、理性の「自己認識」として遂行されるという点には、異論の余地はない。<sup>(7)</sup> しかしその時、その思索と「事実」との関係はどのように解されるべきか、また、その思索を遂行する理性には自己を直接に対象認識の「源泉」として把握する反省能力が認められるのか。——われわれは、以下の論述で、「純粹直観」に関するカントの若干の記述の

考察を通して、これら二つの問題が、『純粹理性批判』の感性論を遂行する思索によって事実上どのように答えられているかを示したいと思う。

## 二 純粹直観の働き

感性論の冒頭の段落によると、「認識がそれを通して直接に対象と関係するもの」は「直観」であり、「直観」は、われわれの場合、「対象が心を……触発することに(8)より」対象がわれわれに与えられる限りにおいてのみ生じる。(8)そして、そのような仕方では表象を得る能力は、「感性」である。(9)それ故、われわれの「直観」は感性的直観である。更に、第二段落によると、「触発」によって「対象が表象能力に及ぼす働きの結果」は「感覚」であり、「感覚」を通して対象と関係する「直観」は、「經驗的」である。(10)ところで、われわれの「直観」は「触発」によってのみ生じ、それ故、常に、「触発」の「働きの結果」すなわち「感覚」を伴う。そして、この「感覚」を通して対象と関係する。従って、われわれの「直観」は經驗的直観である。

かくして、感性論の冒頭の段落及び第二の段落によれ

ば、われわれの「直観」は、対象と関係する限りは、総じて感性的直観であると同時にまた經驗的直観であることになる。

ところが、感性論の主題の中心部を指示する「純粹直観」という術語がある。(11)「純粹」とは、「感覚に属するものが何一つとして見出しされない」という意味である。(12)われわれの「直観」が、対象と関係する限りは総じて感性的經驗的直観であるとするなら、「純粹直観」という術語には形容矛盾が認められないであろうか。(13)あるいは、「純粹直観」とは、「触発」によらずに生じる「直観」、従って非感性的な「直観」なのであろうか。(14)しかしながら、われわれの「直観」は対象と関係する限りは総じて感性的かつ經驗的というテーゼを承認するとともに、「純粹直観」という術語に形容矛盾を認めないという、一見不可能な方向に考察を進める時、かえって、われわれは、「純粹直観」という術語の一つの意味を捉えることができるのである。この術語が感性論ではじめて登場するのは、「感性的直観一般の純粹形式」、「感性的純粹形式」の言い換えとしてである。引用しよう。

「……感性的直観一般の純粹形式は心のうちでア・フ

リオリに見い出されるであろう。現象のすべての多様なものは、この純粹形式のうちで或る種の關係において直観される。感性のこの純粹形式はそれ自身また純粹直観とも呼ばれるであろう<sup>(15)</sup> (感性論第四段落)。

「形式」とは「質料」と対を成す概念である。そして、後者が「規定されうるもの一般」を意味するのに対し、前者は「規定すること (Bestimmung)」を意味する<sup>(16)</sup>。ところで、「感性」の働きの発動は「触発」を俟つてのことであるが、それでも、「感性」が能力であるのは、対象を「現象」<sup>(17)</sup>として現出せしめると、この局面で当のその対象を規定する働きを有するからである。つまり、「感性」にも一つの「規定する自己」が認められる<sup>(18)</sup>のであり、感性的直観とはその自己が担う規定する働きである。しかも、この規定する働きそれ自身は、「触発」の「働きの結果」すなわち「感覚」とは異なるが故に、「純粹」<sup>(19)</sup>である。このような意味が、「感性的直観一般の純粹形式」とか「感性の純粹形式」とかの言葉に込められている<sup>(20)</sup>。

かくしてわれわれは、それらの言葉の言い換えとして登場する「純粹直観」という術語の一つの意味を捉える

ことができる。すなわち、「純粹直観」とは、対象を直観しつつ規定する純粹な働きである。この意味において「純粹直観」を承認することが、われわれの「直観」は対象と關係する限りは総じて感性的かつ經驗的というテーゼの承認と矛盾しないことは、容易に見てとることができる。それどころか、対象を直観しつつ規定する純粹な働きとしての「純粹直観」は、感性的經驗的直観を構成するエレメントでさえある。というのは、感性的經驗的直観は、「感覚」を通して対象と關係するが、この対象、すなわち「現象」は、これを直観することによりこれを現出させつつ規定する純粹な働き (純粹直観の働き) がなければ生じない、からである。「触発」を俟って成立する感性的經驗的直観といえども、それが「現象」としての対象と關係する以上は、対象を直観しつつ規定する純粹な働きを絶対に排除できない。この限りにおいては、「純粹直観」は、感性的經驗的直観に並立するようなこれとは全く異なる種類の「直観」ではなく、われわれにとって唯一の種類の、対象と關係する「直観」である感性的經驗的直観が成立するために不可欠なエレメントである<sup>(21)</sup>。

本節の考察により、「純粹直観」という術語の一つの意味が明らかになった。その意味によれば、「純粹直観」とは働、きである。

### 三 感性論の秩序

われわれは、前節の考察に際し、対象認識の能力としての「感性」の存立を認めた上で、「純粹直観」の一つの意味を確定するという論述の秩序をとった。というのは、われわれの論述は感性論の冒頭の段落及び第二の段落の考察にはじまるものであったが、事実カントは、すでにその箇所を対象認識の能力としての「感性」の存立を認めていたからである。しかし、『純粹理性批判』の思索の秩序は、また感性論の思索の秩序は、われわれのたった論述の秩序とはむしろ逆である。対象認識の能力としての理性は、理性の「自己認識」という思索の中で解明されてゆくべきものであるが故に、いかなる解明も介さずいきなり「感性」が対象認識の能力として定立されるわけにはゆかない。「感性」を定立するためには、その定立を実現するための解明がその定立に先立ち遂行されねばならない。カントは、「感性」を定立するための

十分な解明を遂行したと信じた上で、感性論の冒頭の段落で「感性」の存立を認めているのである。<sup>(22)</sup>

「感性」を定立するための解明とは、空間及び時間を含める思索の中で遂行される。そして、その思索の秩序は、第二版(一七八七年)において一層明確に分節化されている。第二版によれば、空間表象の「形而上学的解明」<sup>(24)</sup>並びに「超越論的解明」<sup>(25)</sup>を通して、空間は、われわれに外的対象が与えられるための条件を成すア・プリオリな「形式」(働、きとしての純粹直観)であるということが論証され、かくして、「感性」という対象認識の能力が右の「形式」を担う能力として定立される、はずである。

まず、「形而上学的解明」の第一論証及び第二論証によって、空間は、外的経験から抽象された経験的概念ではなく、外的経験を可能ならしめる表象として、「すべての外的直観の根底に存する一つのア・プリオリな必然的表象」であるということが論証される。<sup>(26)</sup>引き続き第三論証及び第四論証では、空間は、論弁のないし一般的概念ではなく、「純粹直観」である、と主張される。<sup>(27)</sup>そして、この主張の論拠は、一般的概念であるなら、その概

念を共通的徴表とする無数の実例の「うちに」含まれて  
 いるはずであるが、空間は、逆に、無数の部分空間をす  
 べて己れの「うちに」含みもつ「本質的に唯一」なるも  
 のとして表象される、ということである。<sup>(28)</sup>この論拠は、  
 空間が一般的概念ではないということの論証にとつては  
 十分であるとしても、この論拠が、空間を積極的に「純  
 粋直観」として論証するための論拠として機能するなら、  
 いったいここで何が論証されていると言えるのだろうか。  
 空間は、確かにここで「純粹直観」と呼ばれている。し  
 かしまだ、空間は、対象を直観しつつ規定する純粹な働  
 きの意味での「純粹直観」としては論証されていない。  
 とはいえ、空間が「本質的に唯一」と表象される以上は、  
 「直観」こそが「個別的」なものを表象する<sup>(29)</sup>のであるが  
 故に、空間の表象が直観的表象であるとまではすでに論  
 証されていると言えるだろう。すなわち、ここでカント  
 は、「すべての外的直観の根底に存する一つのア・プリ  
 オリな必然的表象」として論証された空間を、更に、こ  
 れは「本質的に唯一」・「個別的」なるものとしてしか表  
 象されえないという意味で、「純粹直観」と呼んでいる  
 のである。<sup>(30)</sup>

空間とは何であるかの、更に進んだ説明が「超越論的  
 説明」に見られる。ところが、ここでは、「形而上学的  
 説明」によってその性格が明らかにされた限りでの空間  
 が、すなわち「客体そのものに先行し、客体の概念がそ  
 のうちでア・プリオリに規定されうる外的直観」として  
 の「純粹直観」が、「われわれのうちに」見い出される  
 とされ、「心に内在する」とされる。<sup>(31)</sup>しかも、「触発」を  
 俟って「客体の直接的表象すなわち直観を得る主観の形  
 式的性質」(外的、感官一般的形式)として主観のうちに  
 その座を占める、とされる。<sup>(32)</sup>空間論の思索の秩序から言  
 うなら、ここではじめて、空間が、対象を直観しつつ規  
 定する純粹な働きの意味での「純粹直観」であると主張  
 され、同時に、その働きの担い手として、「感性」とい  
 う対象認識の能力が定立されることになるのである。

#### 四 働きの純粹意識

さて、「形而上学的説明」の成果から「超越論的説明」  
 の主張へと思索を歩ませる論拠は何か。この論拠を欠く  
 なら、「超越論的説明」の主張は単なる一つの主張であ  
 るにとどまり、「感性」を定立するに十分な説明ではあ

りえない。その論拠は、『純粹理性批判』の結論に見られる次の思想に潜んでいる。すなわち、必然性ないし厳密な普遍性という目印によって識別されるア・プリアリな表象は、「われわれ自身の認識能力が（感性的印象によって単に誘発されて）自己自身のうちから供給するもの」である、とする思想である。<sup>(34)</sup> この思想をそのまま空間に適用すれば、空間は、すべての外的直観の根底に存し外的経験を可能ならしめるア・プリアリな直観的表象である（形而上学的解明）が故に、外的経験の成立に際し「直観」の能力すなわち「感性」が「供給」した「付加物」<sup>(35)</sup>であるということになる。こうして確かに、空間表象は、「感性」の働きの結果と解され、それを生ぜしめる「感性」を指示する(auf et. zeigen)<sup>(36)</sup>ものと解されることになる。だがしかし、まだ、その空間は、「感性」の「形式」としては、すなわち対象を直観しつつ規定する純粹な働きの意味での「純粹直観」としては把握されていない。

われわれは、ここで、右に紹介した結論に見られる思想の意味を更に根源的に捉え直す必要がある。ア・プリアリな表象は認識能力による「付加物」であるという思

想が異論の余地なく成立するのは、認識能力の働きの結果とされるア・プリアリな表象のうちに他ならぬその結果を生ぜしめる認識能力の働きを見ることができるときだけである。それ故、われわれは、次のように語りうる。空間そのもののうちにその「源泉」である「感性」の働きを見る時、はじめて確実に空間を「感性」による「付加物」として把握することができる、と。すなわちこれは、「形而上学的解明」で考察された空間のうちに、それを生ぜしめる、働き(形式)の意味での「純粹直観」を見る時、はじめて確実に「超越論的解明」への思索の道が開かれるということである。それ故、空間を「形式」として見出しこの「形式」の担い手たる「感性」を定立する(超越論的解明)ためには、「形而上学的解明」における空間の考察の当初から、その空間に即して、働き(形式)の意味での「純粹直観」が意識されていないならばならないのである。

「形而上学的解明」は、外的経験の考察にはじまり、外的経験を可能ならしめるア・プリアリな表象としての空間を取り出し、更に、こうして取り出された空間を孤立せしめその性格を探求しそれを「純粹直観」と規定す

るものであった。そして「超越論的解明」は、「純粹直観」と規定されたその空間を、「触発」を俟って働く「形式」として把握し、ここに理性の「自己認識」の最初の成果として「感性」という対象認識の能力を定立するものであった。このような「自己認識」の思索の歩みは、「経験の事実」を出発点とするという意味で「下から」その「事実」の「源泉」である純粹理性へとさかのぼる歩みである、と言える。

しかし、ひとたび「経験の事実」が思索の出発点とされた後、その「事実」のうちで働く理性（感性論の場合には感性）を説明する思索の歩みは、——総合的方法に関するカントの記述に見られたように——決して「事実」にもとづくものではない。その思索の歩みは、対象を直観しつつ規定する純粹な働きの意味での「純粹直観」の意識、すなわち一種の純粹意識によって導かれる。換言すれば、何らかの「事実」を論拠として感性論の思索が進展するのではなく、「経験の事実」を出発点にとった思索の当初において保持されている、「純粹直観」の働きの純粹意識が、「純粹直観」の働きを純粹な「形式」として提示するという目標に向けて、感性論を導くので

ある。それ故、「純粹理性批判」第一版の序文で語られたように、理性は「自己認識」を得るために「遠く自分の周囲に」出て行く必要はない。感性論の場合も、理性は、「自分自身のうちに」、「純粹直観」の働きの純粹意識を見い出す。

だが、このような純粹意識が存立するからといって、「経験の事実」を飛び越え、ただちにその純粹意識にもとづいて「感性」の定立をおこなうというわけにはゆかない。というのは、「経験の事実」を離れては、対象を直観しつつ規定する純粹な働きの意味での「純粹直観」が成立することはなく、それ故、「純粹直観」の働きの純粹意識もまた成立しえないからである。先に引用した『哲学において最近あらわれた尊大な語調』のくだりからも「経験の事実」から出発しなければならぬ。この「事実」に即してはじめて、「純粹直観」の働きの純粹意識が見い出される。そして、この、自己を直接に対象認識の「源泉」として把握する反省的意識が、「形而上学的解明」から「超越論的解明」へと進む思索の歩みの背景に控えているのである。この意識がなければ、「下か



ら」出発する思索も上方に向かうことはできない。この意識の証言のもとで、思索は、「経験の事実」の条件である「本質的に唯一」なる空間を、対象を直観しつつ規定する純粋な働きの意味での「純粋直観」の結果として把握し、その働きを担う「感性」の定立へと進むのである。

著者各を記すのはすべし。『純粋理性批判』の引用・参照は、書名は記さず、一七八一年第一版をA、一七八七年第二版をBで示し、頁数を添える。カンターの他の著作の引用・参照は、マカニマー版カンター全集(AAと略記)に「ヨウ」ローマ数字で巻数を、「マロム」数字でその巻の頁数を記す。

- (1) Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können, 1783, AAIV, 274. 宛『田舎館所中の( )内は著者による略記。
- (2) AXI, vgl. A 735, B 763, A 849, B 877.
- (3) AXIV.
- (4) cf. Lewis White Beck, *Essays on Kant and Hume*, 1978, pp. 20-21.
- (5) Von einem neuerdings erhobenen vornehmen Ton in der Philosophie, 1796, AAVIII, 390.

- (6) vgl. Gerold Prauss, *Erscheinung bei Kant*, 1971, S. 62.

- (7) この点には「超越論的」という術語の定義(A 11-12, B 25)を参照せよ。

- (8) A 19, B 33.

- (9) *ibid.*.

- (10) A 19-20, B 34.

- (11) vgl. z. B. B 73.

- (12) A 20, B 34.

- (13) vgl. Hans Vaihinger, *Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, Neudruck der 2. Auflage Stuttgart 1922, 1970, Bd. 2, S. 102.

- (14) vgl. Hans Vaihinger, *ibid.*, Bd. 2, S. 27.

- (15) A 20, B 34-35.

- (16) A 266, B 322.

- (17) A 20, B 34.

- (18) vgl. B 407.

- (19) A 20, B 34.

- (20) cf. Robert B. Pippin, *Kant's Theory of Form*, 1982, pp. 72-73. vgl. auch Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft*; Gesamtausgabe Bd. 25, 1977, S. 122-131.

- (21) vgl. Hans Vaihinger, *ibid.*, Bd. 2, S. 107.

- (22) 但し、解明の作業は、テキスト編成の上では後に配置

- されている。注(15)の引用箇所を構成する二つの主文章がともに未来時称であることに注目せよ。
- (23) 以下、空間表象に即して論述を進める。論述内容は時間表象についても概ね妥当する。
- (24) B 37.
- (25) B 40.
- (26) B 38—39.
- (27) B 39—40.
- (28) *ibid.*.
- (29) 例えば、「直観は対象に直接関係し、個別的である」(A 320, B 377)とどう言葉を参照せよ。

- (30) cf. Robert B. Pippin, *ibid.*, p. 64 and pp. 72-73.
- (31) *vgl.* A 23, B 37.
- (32) B 41.
- (33) *ibid.*.
- (34) B 1—2 u. B 3—4. *vgl.* auch A 1—2.
- (35) B 1.
- (36) B 4.
- (37) 「純粹直観」もまた「觸発」を俟つ感性的直観であり知性的直観ではない、ということである。

(東洋大学講師)